

人工種苗の放流効果調査(出雲海域)

(栽培漁業事業化総合推進事業)

内田 浩

1. 研究目的

出雲海域におけるマダイおよびヒラメの放流効果の検証と放流事業の普及啓発を目的とする。なお、この調査は出雲海域だけでなく、全県で調査が実施され、本場が石見海域を、栽培漁業センターが隠岐海域の調査を行う。また、各海域で島根県水産振興協会および各水産事務所、水産課と共同で調査が行われている。

2. 研究方法

漁獲統計調査の対象は美保関町漁協から大社町漁協までの出雲海域7漁協である。市場調査は、マダイとヒラメを漁獲する各漁業種類を対象として、恵曇漁協、境港魚市及び県漁連松江魚市で行った。また、過去の調査により体長等の組成が類似する漁業種類については、まとめて解析した。つまり、マダイでは①沖底、小底1種、釣り及び延縄②小底2種③刺網④定置網の4グループとし、ヒラメでは①小底2種、②沖底及びその他の2グループである。なお、放流魚の確認は、マダイは鼻孔異常(鼻孔隔皮欠損)を、ヒラメは無眼側の色素異常を肉眼観察により行った。

3. 研究結果

(1) マダイ

市場調査により尾叉長13~72cmのマダイ2,017尾のマダイを測定した。漁獲の主体は低年齢群であり15~35cm程度の1~3歳が87%を占めた。平成15年は特に30cm程度の3歳が多く、3歳のみで67%を占めていた。

鼻孔異常は22~60cmで僅か3尾しか確認されず、放流時の鼻孔異常割合と調査時の放流魚出現率から放流魚混獲率は0.55%と推定された。これにより、当海域のマダイ総漁獲量は151トン、水揚げ金額1億4,128万円で、この内放流マダイは1.3トン、水揚げ金額は87.8万円と算定された。

(2) ヒラメ

市場調査により677尾のヒラメを測定した。ヒラメの体長制限は全長30cm(小底2種のみ25cm)となっており、体長制限より小型の個体も見られたが、漁獲の主体は、小底2種で25~40cm、その他で40~60cmであった。放流魚は18尾確認され、漁業種類別の漁獲量と合わせて算定した結果、放流魚の混獲率は、2.9%と推定された。これらにより、出雲海域のヒラメ漁獲量は65トン、水揚げ金額は8,196万円で、このうち放流魚は2.2トン、水揚げ金額275万円と積算された。漁獲量は前年に比べて20%程度増加したが、近年低水準が続いている。

4. 研究成果

研究結果は「平成15年度栽培漁業事業化総合推進事業マダイ、ヒラメ放流効果調査報告書」としてまとめられ、平成16年度市場調査担当者会議において報告される。また、島根県水産振興協会を通じて関係漁業者に報告される。